

公益財団法人図書館振興財団  
第19回 子どもの本 この1年を振り返って 2018年 講演録  
■ヤングアダルトの部■

日本子どもの本研究会・ヤングアダルトアートブックス研究会  
木下 通子

◆ 平成の終わり

- ・ スターの引退 ・小室哲哉 ・安室奈美恵
- ・ 若手の活躍 羽生結弦・大坂なおみ・池江璃花子・藤井聡太・仲邑菫
- ・ 不祥事 山口メンバー 日大悪質タックル レスリングパワハラ
- ・ オウム死刑執行 安田純平さん解放

◆ 災害

- ・ 西日本豪雨
- ・ 草津白根山噴火
- ・ 大阪・北海道地震

◆ 家族の多様性・ジェンダー

- ・ 万引き家族(是枝裕和監督)
- ・ おっさんずラブ(テレビ朝日)
- ・ 同性の結婚
- ・ LGBT

◆ ビジュアル本が多く出版される

◆ YAのための外国文学

◆ 心理系コミックエッセイが数多く出版される

## ■YAが主人公

	中	『給食アンサンブル』(飛ぶ教室の本)/如月 かずさ・著/光村図書出版/2018. 9/¥950/(913. 6)
	中	『放課後ひとり同盟』/小嶋 陽太郎・著/集英社/2018. 4/¥1500/(913. 6)
★	YA	『14歳、明日の時間割』/鈴木 るりか・著/小学館/2018. 10/¥1300/(913. 6)
★	YA	『緑のなかで』/椰月 美智子・著/光文社/2018. 9/¥1500/(913. 6)
★	YA	『夏空白花』/須賀 しのぶ・著/ポプラ社/2018. 7/¥1700/(913. 6)
★	YA	『風に恋う』/額賀 滯・著/文藝春秋/2018. 7/¥1600/(913. 6)
★	YA	『青少年のための小説入門』/久保寺 健彦・著/集英社/2018. 8/¥1650/(913. 6)
	YA	『ブロードキャスト』/湊 かなえ・著/KADOKAWA/2018. 8/¥1500/(913. 6)

## ■家族がテーマ

★	YA	『わたしが少女型ロボットだったころ』/石川 宏千花・著/偕成社/2018. 8/¥1500/(913. 6)
★	YA	『善いミリー、悪いアニー』(ハヤカワ・ミステリ文庫)/アリ・ランド・著, 国弘 喜美代・訳/早川書房/2018. 1/¥1000/(933. 7)
	中	『地図を広げて』/岩瀬 成子・著/偕成社/2018. 7/¥1500/(913. 6)
★	YA	『そして、バトンは渡された』/瀬尾 まいこ・著/文藝春秋/2018. 2/¥1600/(913. 6)
★	YA	『ファーストラヴ』/島本 理生・著/文藝春秋/2018. 5/¥1600/(913. 6)
★	YA	『万引き家族』/是枝 裕和・著/宝島社/2018. 6/¥1300/(913. 6)
★	YA	『フーガはユーガ TWINS TELEPORT TALE』/伊坂 幸太郎・著/実業之日本社/2018. 11/¥1400/(913. 6)
	YA	『青空と逃げる』/辻村 深月・著/中央公論新社/2018. 3/¥1600/(913. 6)

## ■中学生におすすめ

	中	『変化球男子』(鈴木出版の児童文学)/M. G. ヘネシー・作, 杉田 七重・訳/鈴木出版/2018. 10/¥1600/(933. 7)
	中	『エヴリデイ』(Sunnyside Books)/デイヴィッド・レヴィサン・作, 三辺 律子・訳/小峰書店/2018. 9/¥1800/(933. 7)

	中	『風がはこんだ物語』/ジル・ルイス・文, ジョー・ウィーヴァー・絵, さくま ゆみこ・訳/あすなろ書房/2018. 9/¥1400/(933. 7)
	中	『短歌タイムカプセル』/東 直子ほか・編著/書肆侃侃房/2018. 1/¥1500/(911. 167)
	中	『フローラ』(SUPER! YA)/エミリー・バー・作, 三辺 律子・訳/小学館/2018. 2/¥1500/(933. 7)
	中	『この川のむこうに君がいる』/濱野 京子・作/理論社/2018. 11/¥1400/(913. 6)
	中	『ドリーム・プロジェクト』(わたしたちの本棚)/濱野 京子・著/PHP研究所/2018. 6/¥1400/(913. 6)
	中	『探偵は教室にいない』/川澄 浩平・著/東京創元社/2018. 10/¥1500/(913. 6)
	中	『不思議の国の少女たち』(創元推理文庫)/ショーニン・マグワイア・著, 原島 文世・訳/東京創元社/2018. 10/¥840/(933. 7)

### ■現在(いま)を描く

	YA	『刑務所しか居場所がない人たち 学校では教えてくれない、障害と犯罪の話』/山本 譲司・著/大月書店/2018. 5/¥1500/(326. 52)
	YA	『ブラック校則 理不尽な苦しみの現実』/荻上 チキほか・編著/東洋館出版社/2018. 7/¥1500/(375. 2)
★	YA	『学校に行きたくない君へ 大先輩たちが語る生き方のヒント。』/全国不登校新聞社・編/ポプラ社/2018. 8/¥1400/(371. 42)

### ■AIに

★	YA	『ゴリラからの警告 人間社会、ここがおかしい』/山極 寿一・著/毎日新聞出版/2018. 4/¥1400/(914. 6)
★	YA	『AI vs. 教科書が読めない子どもたち』/新井 紀子・著/東洋経済新報社/2018. 2/¥1500/(007. 13)
★	YA	『10年後の仕事図鑑 新たに始まる世界で、君はどう生きるか』/堀江 貴文ほか・著/SBクリエイティブ/2018. 4/¥1400/(304)

### ■多様性・ジェンダー

★	YA	『北欧に学ぶ小さなフェミニストの本』/サッサ・ブーレグレン・作, 枇谷 玲子・訳/岩崎書店/2018. 5/¥1500/(367. 1)
★	YA	『日本のヤバい女の子』/はらだ 有彩・著/柏書房/2018. 6/¥1400/(910. 2)
★	YA	『みえるとかみえないとか』/ヨシタケ シンスケ・さく, 伊藤 亜紗・そうだん/アリス館/2018. 7/¥1400/(絵本)
	YA	『かならずお返事書くからね』/ケイトリン・アリフィレンカほか・著, リズ・ウェルチ・編, 大浦 千鶴子・訳/PHP研究所/2018. 3/¥1600/(289. 3)

★	YA	『ようこそ、難民！ 100万人の難民がやってきたドイツで起こったこと』/今泉 みね子・著/合同出版/2018. 2/¥1500/(334. 434)
	中	『ふたりママの家で』/パトリシア・ポラッコ・絵・文, 中川 亜紀子・訳/サウザンブックス社/2018. 10/¥2300/(絵本)
★	YA	『「女子」という呪い』/雨宮 処凛・著/集英社クリエイティブ/2018. 4/¥1100/(367. 21)

#### ■障害とともに

	中	『サイド・トラック 走るのニガテなぼくのランニング日記』/ダイアナ・ハーモン・アシャー・作, 武富博子・訳/評論社/2018. 10/¥1600/(933. 7)
	中	『ともだちってどんなひと?』(LLブック)/赤木 かん子・著, 濱口 瑛士・絵/埼玉福社会出版部/2018. 10/¥1800/(158)
	中	『みんなちがって、それでいい パラ陸上から私が教わったこと』(ポプラ社ノンフィクション)/宮崎 恵理・著, 重本 沙絵・監修/ポプラ社/2018. 8/¥1300/(782. 3)
	YA	『うつ病九段 プロ棋士が将棋を失くした一年間』/先崎 学・著/文藝春秋/2018. 7/¥1250/(796. 021)

#### ■歴史に学ぶ・戦争を知ろう

★	YA	『MARCH 1~3(全3巻)』/ジョン・ルイスほか・作, ネイト・パウエル・画, 押野 素子・訳/岩波書店/2018. 3~/¥1900~/ (316. 853)
	YA	『原爆 広島を復興させた人びと』/石井 光太・著/集英社/2018. 7/¥1600/(217. 606 )
	YA	『生きづらい明治社会 不安と競争の時代』(岩波ジュニア新書)/松沢 裕作・著/岩波書店/2018. 9/¥800/(210. 6)
	中	『石たちの声がきこえる』/マーグリート・ルアーズ・作, ニザール・アリー・バドル・絵, 前田 君江・訳, ファラーフ・ラヒーム・アラビア語訳/新日本出版社/2018. 8/¥1500/(絵本)
	YA	『ある晴れた夏の朝』/小手鞠 るい・著/偕成社/2018. 8/¥1400/(913. 6)
	中	『戦争なんか大きい！ 絵描きたちのメッセージ』/子どもの本・九条の会・著/大月書店/2018. 9/¥1800/(319. 8)
	YA	『マリー・アントワネットの日記 1~2』(新潮文庫nex)/吉川 トリコ・著/新潮社/2018. 8/¥550~/ (913. 6)

#### ■世界を知ろう

★	YA	『ノモレ』/国分 拓・著/新潮社/2018. 6/¥1600/(382. 68)
★	YA	『THE LAST GIRL イスラム国に囚われ、闘い続ける女性の物語』/ナディア・ムラドほか・著, 吉井 智津・訳/東洋館出版社/2018. 11/¥1, 800/(302. 273)
★	YA	『82年生まれ、キム・ジョン』/チョ ナムジュ・著, 斎藤 真理子・訳/筑摩書房/2018. 12/¥1500/(929. 13)

★	YA	『台湾の若者を知りたい』(岩波ジュニア新書)/水野 俊平・著/岩波書店/2018. 5/¥860/(302. 224)
---	----	---

## ■自然科学

	YA	『雑草はなぜそこに生えているのか 弱さからの戦略』(ちくまプリマー新書)/稲垣 栄洋・著/筑摩書房/2018. 1/¥840/(471)
	YA	『ほぼ命がけサメ図鑑』/沼口 麻子・著/講談社/2018. 5/¥1800/(487. 54)
★	YA	『リアルサイズ古生物図鑑 古生代編 古生物のサイズが実感できる!』/土屋 健・著, 群馬県立自然史博物館・監修/技術評論社/2018. 8/¥3200/(457)
	YA	『宮沢賢治の元素図鑑 作品を彩る元素と鉱物』/桜井 弘・著/化学同人/2018. 6/¥1600/(431. 11)
★	YA	『わけあって絶滅しました。世界一おもしろい絶滅したいきもの図鑑』/丸山 貴史・著, 今泉 忠明・監修, サトウ マサノリほか・絵/ダイヤモンド社/2018. 7/¥1000/(482)
	YA	『知っていますか? SDGs ユニセフとめざす2030年のゴール』/日本ユニセフ協会・制作協力/さ・え・ら書房/2018. 9/¥2500/(333. 8)

## ■女性活躍

★	YA	『世界を変えた50人の女性科学者たち』/レイチェル・イグノトフスキー・著, 野中 モモ・訳/創元社/2018. 4/¥1800/(402. 8)
★	YA	『世界を変えた100人の女の子の物語 グッドナイトストーリーフォーレベルガールズ』/エレナ・ファヴィツリほか・文, 芹澤 恵ほか・訳/河出書房新社/2018. 3/¥2400/(280. 4)
	中	『大統領を動かした女性ルース・ギンズバーグ 男女差別とたたかう最高裁判事』/ジョナ・ウィンター・著, ステイシー・イナースト・絵, 渋谷 弘子・訳/汐文社/2018. 3/¥1800/(絵本)

## ■ノンフィクション作品

	YA	『極夜行』/角幡 唯介・著/文藝春秋/2018. 2/¥1750/(297. 8)
	YA	『いつかすべてが君の力になる』(14歳の世渡り術)/梶 裕貴・著/河出書房新社/2018. 5/¥1300/(778. 77)
	YA	『本のエンドロール』/安藤 祐介・著/講談社/2018. 3/¥1650/(913. 6)

## ■コミックエッセイ

★	YA	『多分そいつ、今ごろパフェとか食ってるよ。』/Jam・マンガ・文, 名越 康文・監修/サンクチュアリ出版/2018. 7/¥1100/(159)
★	YA	『生理ちゃん』/小山 健・著/KADOKAWA/2018. 6/¥1200/(726. 1)

	YA	『俺、つしま』/おぶうのきょうだい・著/小学館/2018. 4/¥1000/(645. 7)
★	YA	『しんどい母から逃げる！！ いったん親のせいに見たら案外うまくいった』/田房 永子・著/小学館/2018. 3/¥1000/(916)
★	YA	『僕が僕であるためのパラダイムシフト』/EMI・著/KADOKAWA/2018. 12/¥1000/(916)

#### ■他にもいろいろ

	中	『13歳からの絵本ガイド YAのための100冊』/金原 瑞人ほか・監修/西村書店/2018. 4/¥1800/(019. 53)
★	YA	『黒板アート甲子園作品集 高校生たちの消えない想い』/日学株式会社・総監修/日東書院本社/2018. 9/¥3600/(720. 87)
	YA	『地球星人』/村田 沙耶香・著/新潮社/2018. 8/¥1600/(913. 6)
	YA	『彼女は頭が悪いから』/姫野 カオルコ・著/文藝春秋/2018. 7/¥1750/(913. 6)
★	YA	『愛なき世界』/三浦 しをん・著/中央公論新社/2018. 9/¥1600/(913. 6)
	YA	『54字の物語 意味がわかるとゾクゾクする超短編小説』/氏田 雄介・作, 佐藤 おどり・絵/PHP研究所/2018. 3/¥1000/(913. 6)

**公益財団法人図書館振興財団**  
**第19回 子どもの本 この1年を振り返って 2018年 講演録**  
**■ヤングアダルトの部■**

講演：日本子どもの本研究会・ヤングアダルトアートブックス研究会 木下 通子

みなさん、こんにちは。ヤングアダルトアートブックス研究会の木下通子と申します。まず、「『ヤングアダルトアートブックス研究会』とは何か」と思われる方もいらっしゃると思いますので、少しご説明いたします。本日、会場にも「日本子どもの本研究会」の会員の方も多くいらっしゃるのではと思いますが、その中で「ヤングアダルト」＝中学生・高校生に関心があるメンバーが集まり、「ヤングアダルトアートブックス研究会」（以下「研究会」）が2年前に発足されました。現在、隔月くらいで中学生や高校生を交えて読書会を行ったり、出版社の方をお呼びして勉強会を行ったりしています。私自身、埼玉県立浦和第一女子高校の司書として務めており、研究会メンバーの中にも学校司書がいます。中学生から高校生に向けた面白い本に加えて「アートブックス」、いわゆる「ヤングアダルト本」と言われている読み物だけではなく、最近ではビジュアル系の本も多く出版されていますが、そういった作品もまとめて一緒に読み、勉強しています。本日はご紹介するおすすめ本は、研究会のメンバー4～5名で2018年を振り返り、どんな本が面白かったかを3～4か月の間に何回か集まって合評して、選んだものです。私自身、高校の司書であるため高校生たちとは近しく過ごしており、彼らが注目する本も分かるのですが、残念ながら中学生については現場のリアルな感じが掴めていません。また、今年は外国文学でもよい作品が多く出版され、薦められて頑張って読みましたが、限られた時間の中で全てをご紹介することは難しいので、今回は特に私が得意とするジャンルを多めにご紹介していくこととなりますが、予めご了承くださいませと思います。

**■YAが主人公**

では、1冊目を紹介したいと思います。今年は「平成最後」という年で節目のニュース、嵐の活動休止や、安室奈美恵さんや小室哲哉さんの引退なども、ヤングアダルト世代にとっては非常に大きなニュースで、ある意味、時代が変わるといふ転換期でもあったのではないかと思います。絵本やフィクションと同様にヤングアダルトの分野でも、2018年は家族の多様性やジェンダーなどについて問われるような作品が多く出版された年でもあったように思います。そういった中から、小説をはじめいくつか紹介していきたいと思います。

『14歳、明日の時間割』。著者は鈴木るりかさんです。鈴木るりかさんの本は、『さよなら、田中さん』（小学館、2017年10月刊）がとても話題になりましたが、今回はそこから更に一歩進んだような、読ませる短編を書いています。私が勤務している学校でも大人気で、貸し出しが続いています。

続いて『緑のなかで』。著者は椰月美智子さんですが、お好きな方は非常にお好きという作家さんであるように思います。椰月さんは比較的スピリチュアルな作品を書かれることも多いです

が、今回の作品では家族の形を描いた物語で、大学生が主人公です。登場する大学は「H大学」と書かれていますが、北海道大学ですね（笑）。主人公の啓太は関東在住ですが、北大に入学し大学の学生寮に入って、そこでたくさんの新しい友達と出会います。そこで展開する物語の瑞々しさもとてもいいのですが、そこから更に、実はお母さんが不倫をしていたという家族の問題が出現し、父と母の関係がどうなるのか、そして主人公が自身と親の関係について、彼が大人になっていく過程でどう捉えていくのかということも描かれています。少し新しい視点で家族を描いたYA世代の男の子を主人公にした小説でした。

次に、須賀しのぶさんによる『夏空白花』。これは戦争が始まったために、中止となってしまった高校野球を復活させようとする物語で、新聞記者を中心に展開する人間模様がすごくよく描かれています。『下町ロケット』（池井戸潤）にも似た雰囲気を持つ、しかしそれを更にハードにした感じの物語で、こちらもとても面白い作品でした。

『風に恋う』。こちらは額賀滯さんによる作品です。額賀さんも新しい作家さんですが、これまでもたくさんの小説を発表されていて、実際の高校生を追いかけながら書いている方です。本作品にも埼玉県の高校の吹奏楽部が登場しますが、これも取材に基づいて描かれているそうです。余談ですが、埼玉県の高校の入試問題で額賀さんのスピンオフ作品の一節が使われていて、ご本人が大喜びで、Instagramでそのことを報告されていたそうです（笑）（[https://www.instagram.com/nukaga\\_mio/p/Bugb5u0F8jU/](https://www.instagram.com/nukaga_mio/p/Bugb5u0F8jU/)）。中学生・高校生くらいの子たちの心情を表現することがとても上手な方で、おそらく今後もたくさん登場される作家さんではないかと思います。とても読みやすいので、ぜひ皆さんにも読んでいただけたらと思います。

『青少年のための小説入門』は「満を持して描かれた」作品という印象で、正直「次があるのか」というほどよく練り上げられた物語でした。いじめに遭っている中学生の一真が、その状況から脱却するために、何か自分でできることはないかと考えています。そんな彼が、ディスレクシアではあるけれどすごく頭が良く、あらゆる小説のプロットを組み立てることができるヤンキーの若者、登とタッグを組み、小説を書いていくという物語です。私自身、学校図書館で勤務する人間として面白かったことは、本作に登場する多くの名作についての解説が、なかなか適当であるということです。いい本だけではなく「駄作」という作品もきちんと読んで、その駄作をも小説に取り入れようとしているところが、とても新しく面白い小説でした。

## ■家族がテーマ

次に「家族」をテーマとした作品を集めました。『わたしが少女型ロボットだったころ』。こちらは中学生くらいから読める作品です。もうお読みになった方もいらっしゃるかと思いますが、不思議な印象を受けませんでしたか？物語も主人公の少女がある日、自分がロボットだったということに気がつくところから始まります。実は彼女は摂食障害を患っているのですが、これは彼女とその母親との関係が影響しています。物語の始まり方も不思議ですが、この子を支える友達がすごくいい人たちで、みな、この子がロボットであることを受け入れていきます。そして、少



女が自身の親との関係も含めどう乗り越えていくか。今どきの子どもたちの心に、大変寄り添っている作品だと思いました。

外国文学から『**善いミリー、悪いアニー**』を紹介します。物語は、アニーの告発によって彼女の母親が逮捕されることから始まります。その後、アニーは「ミリー」と名を変え、ロンドンの里親に引き取られますが、そこでもまたいじめに遭います。彼女の心の中に良い自分と悪い自分が出現し、葛藤が起こります。読み応えがある作品ですが、読んでいて心が苦しくなるようなお話で、高校生よりも大人の私たちが読んだほうが、心にぐっとくるような作品かもしれません。

『**そして、バトンは渡された**』。瀬尾まいこさんは、中・高校生からとても人気のある作家さんで、もともとは中学校の国語の先生を務めていらっしゃった方でもあります。教師を辞められた後、作家さんになり独り立ちされ、まだ小さなお子さんの子育て中であるそうです。この物語では、優子という女の子が主人公ですが、お父さんが3人とお母さんが2人。17年間生きていく間に、自分の家族の形が7回も変わっています。産みのお母さんは幼い時に亡くなり、お父さんに育てられますが、そのお父さんが再婚することになります。しかし、お父さんの海外転勤が決まり、お父さんの再婚相手の女性から、一緒に住もうと提案されます…。このように、色々な人々が入れ替わり立ち代わり、優子の人生に関わってくることになるのですが、登場する人は皆いい人で、最後は本当にほっこり、ハッピーエンドで少し涙が出てきてしまうようなお話です。物語も優子が通う高校の面談から始まりますが、面談の際、担任の先生から「困ったことやつらいことは話さないで伝わらないわよ」（p. 4）と言われます。でも当の優子は「全然不幸ではない」のです。また、瀬尾さんは食べるものを書くのがとても上手な作家さんで、何でもおいしそうです。私自身、この作品は「本屋大賞」（「本屋大賞」HP <https://www.hontai.or.jp/>）を取っていると思っています（2019年3月14日現在）。うなずいていらっしゃる方、いますね（笑）。ぜひ、その点にもご注目いただければと思います。

『**ファーストラヴ**』も直木賞（2018年上半期）を受賞した作品ですので、既にお読みになっている方もいらっしゃるかもしれません。島本理生さんはどちらかと言うと、『**ナラタージュ**』（角川書店、2005年2月刊）のような、男女間の比較的どろどろしたものを描いた作品の印象が強かったのですが、本作は家族を描いた物語でした。画家の父親とその再婚相手との間に産まれた大学生の環菜は、父親を刺し殺し逮捕されますが、彼女自身はなぜ父親を殺したのかが分かりません。臨床心理士の由紀は事件についての執筆を依頼され、環菜にインタビューを行い、その生い立ちを聞いていきますが、その過程で自身のつらい過去もよみがえってきます。環菜と由紀の話が交互に展開してつながっていき、これまでの島本さんの小説とは少し作風が変わったと思わされます。さすが賞を取っただけあると感じさせてくれる作品でした。

『**万引き家族**』は、映画をご覧になった方もいらっしゃると思います。これも家族の多様性を描いた作品です。是枝さんがご自身の映画の書き下ろしをされたためか、私の周りでこの映画を観た人は、映画と小説の内容がとても似通った印象だと言っていました。この小説でも、虐待を

受けている女の子を擬似家族とも言える人々が引き取り、彼らの人間模様が描かれています。昨年度のYAを語る上で、大きなキーワードの1つでもある「家族」をテーマにしている意味で、外せない作品であると思いました。

「家族」というテーマで最後に紹介するのは『フーガはユーガ』。こちらも著者が伊坂幸太郎さんと有名な方ですし、お読みになっている方も多くいらっしゃると思います。伊坂さんの作品は、公共図書館などでも非常に人気があります。主人公は「フーガ（風我）」と「ユーガ（優我）」という双子で、物語は仙台市内のあるファミレスで、優我が1人の男性に自身の過去を語る所から始まります。この双子には特殊能力があり、誕生日の日だけ互いの体が入れ替わるのです。その能力を武器に彼らは何をするのか。この物語の背景にあるものも虐待で、2人には父親から暴力を受けながら育ったという過去があります。そんな彼らが、どんな人生を歩んでいくのかを「伊坂幸太郎節」とも呼ぶべきテイストで描いた作品で、本作も今の時代を象徴している物語であるように思います。

### ■現在（いま）を描く

続いて「現在（いま）を描く」というテーマで集めた作品を紹介したいと思います。まず、『学校に行きたくない君へ』。これも学校図書館では定番の本で、少し前に亡くなられた樹木希林さんやリリー・フランキーさん、表紙を描いている西原理恵子さんなど、不登校であったり、少し不遇な子ども時代を過ごされたりした方々が、ご自身の体験などを語られています。本書を編集されたのは全国不登校新聞社で、編集やインタビューに関わられたのもやはり不登校・ひきこもりの当事者や経験者である子どもや若者の方々です。そんな方々が「自分が本当に聞きたいことを聞く」という思いから自ら人選も行い、取材されたそうです。このタイトルも興味を引きますので、YAコーナーに置いておくと子どもたちが自然に手に取ってくれる本ではないかなと思います。

### ■AIに

AI関係の本も、今年は多く出版されたように思います。まず、『ゴリラからの警告』を紹介します。これは、山極寿一さんという、ゴリラについて研究をされている方が書かれています。毎日新聞の連載コラム「時代の風」を大幅に加筆されたものであるそうです。「私はゴリラの国へ留学してきた。いつもそう言っている。まさか、と笑う人もいるが、私は本気でそう思っている」（p. 2）という書き出しで始まりますが、人間の生活とゴリラの生態とをとってもリアルに比較しています。最近、物事を比較することに焦点を置いたタイプの本が非常に多くなってきているように感じますが、その中でもとても考えさせられる面白い本でした。

『AI vs. 教科書が読めない子どもたち』。これも外せない内容の本でした。実は私自身、この新井紀子先生が提唱されている「リーディングスキル（基礎読解力）テスト」を埼玉県教育センターで受けたことがあります。テスト後に新井さんの講演を聞くという教職員対象の講座でしたが、あまりできずにしょぼんとしてしまったくらいでした。しかし、新井先生が参加者の

方々に「みなさん、点数が悪かったのではないですか？でも、そこで落ち込むことはありません。みなさんはそういう訓練を受けていないのですから」と教師に向けておっしゃっていました（笑）。新井先生の研究室の方も最初はテストの結果は芳しいものではなかったけれど、訓練を受けたら次第にできるようになったと強調されていました。新井先生は本書で、「教科書が読める」ということと「本が読める」ということは全く別ものであると解説した上で、「リーディングスキル＝基礎読解力」を身につけることの重要性を説いています。現在の中・高校生は、単語や年表の暗記、数学の計算など表層的な知識があるにも関わらず、教科書の記述の意味を理解するための基礎読解力がとても低いということ、そのスキルの偏りはA Iの特性ととても似ているため、将来の労働力がA Iにとって代わられる危険性があるということなどについて警鐘を鳴らされています。小学校の図書館などでも、「基礎読解力」をつけるためのサポートを行うためにはどうしたらよいかと考えさせられた1冊でした。

現在、落合陽一さんはとても多くのテレビ番組に出演されていますね。テレビで見ない日はないのでという落合さんと、「ホリエモン」こと堀江さんが書いた『10年後の仕事図鑑』。これも中・高校生に非常に人気の本です。今年は「激動の時代に生きる私たち」や「A I登場で私たちの仕事なくなる」といった、ざっくりしたテーマや内容の本が多いように感じます。本書にも「A I」というキーワードが登場しますが、そこは、起業して色々なことにチャレンジされている落合さんと堀江さんということもあり、「A Iが登場しても仕事はなくなる」「A Iができないことはこういったこと」を説明した上で、「労働をするだけでなく、自分の頭で考えて経営者の視点で仕事をしていこう」と「これからの若者たちはこういう面で頑張れよ」と語りかけている本です。そういった言葉は若者の心に響いている印象がありますので、大人の方々には、ぜひこういう本もチェックしていただけたらと思います。

## ■多様性・ジェンダー

「多様性とジェンダー」というテーマでまとめた本の中から、『北欧に学ぶ小さなフェミニストの本』。これも人気があった本です。研究会では、本書の翻訳をされた枇谷玲子さんをお呼びし、高校生と一緒に読書会をさせていただきました。エッパという女の子が朝ご飯を食べながら新聞の4コマ漫画を探していますが、新聞の中のある写真が少しおかしいことに気づきます。写真の中には「世界の権力者」たちが並んでいますが、みんな男性です。しかし、次のページをめくるとエッパの「ううん、本当はこうあるべきなのよ」（p. 10）という言葉と共に、並んでいる人々が全て女の子に代わっています。中には逆立ちしている子もいます。ここにいらっしゃるみなさんも、そうあるべきだと考えられていると思いますが、実際の世の中はなかなかこうはなりませんね。この本は中・高校生くらいの、特に女の子が読むと「これから頑張ろう」と思わせてくれる本ですが、読書会で読んだ時には男子も一緒に参加してくれました。ジェンダーといったテーマについて考えるきっかけとしては、とても大きい本だったのではと感じます。

『日本のヤバい女の子』は、昔話に登場するエキセントリックな女の子たちについて考える少し面白い本です。「竹取物語」のかぐや姫なども登場します。最初に紹介されているのは「おか

め」さん。おかめさんについては私自身あまり知らなかったのですが、彼女の「ヤバさ」は「献身」的であるところ。彼女はベテラン大工・長井飛驒守高次の妻でしたが、ある時、重要な寺の工事を任された高次は、柱を作るための木材を誤った寸法で切断してしまいます。パニックになっていた高次に、おかめさんはアドバイスし見事その危機を乗り越えます。しかし、アドバイスしたことをおかめさんは強く恥じ入り、ある行動に出てしまう。今の時代の感覚で見ると「何だこりゃ」ですが、そんな彼女の「ヤバさ」が訥々と解説されています。中学生や高校生にこの本を読むと、笑いながら感想を語り合ってくれますが、やり取りする中で「そこに反応するんだ」といったことも分かり、面白かったです。子どもたちは文章を表面的に読んでしまうことも多いかと思いますが、本を手渡す大人が読んで理解し、どういった観点で読めばいいかなど一声添えるとよいのではないかと思います。

絵本を紹介します。ヨシタケシンスケさんの『[みえるとかみえないとか](#)』。ヨシタケさんはやはり高校生にもものすごい人気で、YAを語る上で絶対に外せない作家さんです。本作は『目の見えない人は世界をどう見ているのか』（光文社、2015年4月刊）の著者、伊藤亜紗さんにヨシタケさんが相談しながら描かれた本です。主人公の「ぼく」は宇宙飛行士で、色々な星の調査をするのが仕事ですが、ある星で3つ目の宇宙人たちに出会います。彼らは前も後ろも一度に見えるようで、地球人の「ぼく」は、2つ目しかないことについてとても気の毒がられます。でも「みえかた」がちがうだけというだけで、「ぼく」にとってはこれが普通です。「見える人」は「見えない人」を「気の毒」と一方的に捉えがちですが、「見えない人」と「見える人」とでは世界の捉え方や感じ方が違う、つまり「3つ目の宇宙人」と「ぼく」のように、別の感性をもって、違う世界に住んでいるとも言えるのだろうか、と考えさせられます。人によって価値観が違うということをヨシタケさんが表現してくれていて、そんな部分がやはり中・高校生には響くようです。もちろん小学生にも。本を手渡す際は「ヨシタケさんの絵本だよ」というだけでなく、彼が伝えたいことについても触れると、話題が広がる本ではないかと思いました。

異文化を知るという観点から紹介する1冊『[ようこそ、難民!](#)』。今、どの学校でも多文化・異文化理解を進めるための授業が行われていますね。また、外国籍のお子さんも非常に増えてきていて、そういう方々とどのように共生していくかが問われている時代でもあります。この本では、難民の方たちをどのように捉えてきたかということが描かれていて、とても読み応えのある本です。

フェミニズム関連本として話題となった『[「女子」という呪い](#)』。著者の雨宮処凛さんは非常に有名ですし、以前からたくさん本を書かれていますね。「女の子の生きづらさ」をテーマとした本は私自身、女子校に勤めているということもあって特に注目して選書し、実際に生徒たちもよく手に取ってくれています。共学の学校でお務めの方々に尋ねても、多様性についての理解も広まり、様々な子どもたちがいるという状況が普通になってきている今、こういったテーマの本は、意外と男の子にもよく読まれているということでお勧めの1冊です。

## ■歴史に学ぶ・戦争を知ろう

次に『MARCH 1～3』を紹介します。岩波書店のHPにもありましたが、本作品は初めて岩波から出版されたグラフィック・ノベルで、アメリカの公民権運動で重要な役割を果たしたジョン・ルイスさんの自伝を3冊にまとめたものです。これまでもジョン・ルイスさんについての本や、関連したテーマの作品は多く出版されていたように思いますが、グラフィック・ノベルという形で出されたことに大きな意味があると評価されています。本作品で個人的に特に注目したのは、図書館の司書さんが登場するページでした。「私は図書館が大好きだった『ジェット』や『エボニー』といった黒人雑誌や、『ボルチモア・アフロアメリカン』『シカゴ・ディフェンダー』といった黒人新聞を初めて見たのはこの図書館だ 図書館員のコリーン・ハーヴィーさんのことは決して忘れない」（第1巻，p. 49）と書かれています。彼女は子どもたちに色々な本を読むように伝えていますが、やはり子ども1人の図書館との出会いは、その子の後の人生を形作るということが描かれているように感じます。

## ■世界を知ろう

さて、「世界を知ろう」という視点で集めた4冊をご紹介します。まずは『ノモレ』。本書は、国分拓さんが「NHKスペシャル」のために取材した内容をまとめたものです。国分さんはアマゾンにもう15回ほど行かれていて、現地で文明社会とは未接触の原住民「イゾラド」について、非常に入念に調べられたそうです。100年以上前、アマゾンの森の奥のゴム農園では先住民の人々が、富を求めて渡ってきた白人の奴隷として働かされていました。その多くは「イネ族」という部族でしたが、重労働と伝染病で多くの仲間たちが亡くなっていく中、ついに彼らは逃げ出します。しかし追っ手が迫り、誰もが諦めかけた時、彼らは故郷での再会を誓い二手に別れて逃げます。彼らは二度と出会うことはありませんでしたが、本書では、その彼らの100年後を追っています。国分さんはノンフィクションの作家さんとしては非常に有名ですし、文章も読みやすいので、この本も中・高校生やヤングアダルト世代にお勧めの1冊です。

昨年の11月に出版された『THE LAST GIRL』。この本を書かれたナディア・ムラドさんはイスラム過激派ISISに捕えられ、性奴隷となった方です。以前刊行された『生きながら火に焼かれて』（スアド著）という本を覚えていらっしゃる方はいますか。あの本を読んだ時、私はまだ20代で司書になりたてでしたが、日本はこんなに平和なのに、世界ではこんなことが起こっているのだと、大変な衝撃を受けました。昨年の暮れに読んだこの本も同様に衝撃的な内容で、夜にずっと読んでいたのですが、途中でやめることができませんでした。3部構成の本で、第1部ではムラドさんが住んでいるコーチョという、とてもどかな村について書かれています。小林豊さんの『せかいいちうつくしいぼくの村』（ポプラ社，1995年12月刊）の情景を思い返していただければと思いますが、あの作品で描かれているような羊を飼っていて、貧しいけれど夕飯にお母さんがお鍋を煮ていて「お帰り」と家族に呼びかけるような静かな暮しです。しかし、突然ISISの戦闘員が現われ、村中の人々が集められます。人々は小学校に押し込められ、男性と高齢女性たちは皆殺しにされてしまいます。ムラドさんを含む若い女性たちだけが残され、ISISに連れ去られますが、彼女たちは文字通りご褒美として色々な男たちに

買われ、性暴力を受けることとなります。第2部では、彼女たちの悲惨な状況が綴られています。ムラドさんはある家族の助けを借りて、I S I Sから逃亡します。難民キャンプにたどり着いた彼女はその後、I S I Sのジェノサイド（虐殺）について声を上げるようになります。そして、I S I Sによる性暴力の被害者の尊厳を訴えるために国連でスピーチを行い、その行動によって彼女はノーベル平和賞を受賞するのです。メディアでもI S I Sによる蛮行は伝えられていましたし、ムラドさんが非常に過酷な経験をされた方であることは想像に難しくありません。しかしこの本は、ただ「知っている」ということと「理解する」ということは全く違うということ強く思わせてくれます。図書便りを作成する際、「新着案内」で子どもたちに向けて書評を書いています。本書については特に熱く、思い入れをもって書きました。私が勤務する学校では、この本もどんどん貸し出しされています。内容的にも手に取ることが難しい本ではあるかもしれませんが、同じ世界でこんなことが起きているということ、今の日本の子どもたちに知ってもらうためにも読んでほしい1冊です。

同じ世界で起こっていることを知る上で、『82年生まれ、キム・ジョン』も外せない1冊かと思えます。こちらは韓国の女性の方が書かれた小説です。大変流行っている本ですので、お読みになられた方もいらっしゃるのではないのでしょうか。キム・ジョンは、ある小さな広告代理店に勤めていますが、妊娠とともに退職し、女の子を出産します。しかし、その子が1歳の誕生日を迎えた夏頃から、彼女に不思議な症状が表れ始めます。突然、彼女のお母さんや友人の人格が憑依したかのように行動したり、話し出したりするのです。本書は終始ドキュメンタリータッチで描かれ、様々な人格を通してジョンは、自身が感じていた苦しみやつらさを語り出します。おそらくそれは、日本の女性たちが昭和時代に感じていたことにとっても近いのではないかと感じました。韓国では大ベストセラーとなったそうで、現在、韓国の女性の方々は、ジェンダーの問題についても強い関心をもって動いているようです。日本でも、女性がまだまだ生きづらいことは変わっていないように感じます。中・高校生にもこういうことを知ってほしいと思い、紹介しました。

4冊目は『台湾の若者を知りたい』です。岩波ジュニア新書でも「新しい形を作りたい」という思いがおりのように、本シリーズからは、様々なテーマの本が出されています。日本と台湾の関係はおおむね良好ではあるものの、両国の若者世代が互いにコミュニケーションを取ったりする機会はあまりありません。著者の水野俊平さんは、両国が今の関係を維持していくためには、もっと私たちが台湾人の日常生活や考え方に興味を持つ必要があるのでは、とこの本を書かれたそうです。本書では、台湾の小学生から大学生まで生の声を聞きながら、彼らの生活事情や学生生活などを紹介しています。現在、台湾は非常に旅行しやすくなっているようで、日本でも修学旅行の行き先が台湾という学校は多いようです。実はうちの学校もそうです。そういう意味でもお勧めの本ですので、ぜひ図書館などに置いていただけたらと思います。

## ■自然科学

テーマは「自然科学」に移ります。『リアルサイズ古生物図鑑 古生代編』。私は「埼玉県高

校図書館フェスティバル」という会の実行委員長も務めています。この会で「埼玉県の高校図書館司書が選んだイチオシ本」というフリーペーパーを作成しています（「埼玉県高校図書館フェスティバル」HP [http://shelf2011.net/htdocs/index.php?page\\_id=197](http://shelf2011.net/htdocs/index.php?page_id=197)）。毎年、埼玉県の県立・私立高校に勤める司書およそ100名が投票し、その年のベスト1から10位までを決めています。2018年度、第1位に選ばれたのがこの本でした。本書では、先カンブリア時代末の「エディアカラ紀」から古生代末の「ペルム紀」までの古生物を、魚屋から駐車場まで様々な現代景色の中に配置し、そのリアルなサイズ感を描き出しています。古生物好きの間ではトレンドの「アノマロカリス」は、魚屋の売り物テーブルの上でサバやスズキと一緒に並べられています。イカのお寿司と一緒に並んでいるのは「ネクトカリス」、チューリップの花束の中に一輪刺さっている見慣れない生物は「シッフアサウクトウム・グレガリウム」です。埼玉県高校図書館フェスティバルでは、著者の土屋健さんにインタビューも行っています（同HP「著者・編集者・監修者への特別インタビュー」 [http://shelf2011.net/htdocs/?page\\_id=202](http://shelf2011.net/htdocs/?page_id=202)）。この本の古生物たちは、群馬県立自然史博物館の学芸員の方々の監修の下、本当にサイズが合っているのかを逐一確認しながら描かれたとのことで、掲載する生物も厳選されているそうです。正確な情報をきちんと検証しないまま作られている本もあると思われる中、図鑑として子どもたちも安心して使える1冊です。夏には続編が出るとのことです。

『わけあって絶滅しました』。こちらの本で扱っているものも、やはり絶滅した生き物ですが、目次を開いていただくと「油断して、絶滅」「やりすぎて、絶滅」というように、まず大きなテーマで分けられ、その中で更に「やさしすぎて絶滅『ステラーカイギューさん』」「のろまずいで絶滅『ドードーさん』」など絶滅した理由と共に、それぞれの生物の名前が並べられています。読者の引きつけ方もとてもうまいです。おそらく小学校の高学年くらいの男子が大好きなタイプの本ではないでしょうか。個人的に少し面白いと思ったのは、カモノハシのように「絶滅していそうで、助かった」という生き物も併せて紹介されているところです。皆さんもよくご存知の始祖鳥も載っていますが、始祖鳥は「ちゃんと飛べなくて絶滅」。この疑問については、先程紹介した土屋さんにも伺ってみたいところですが（笑）、みんなで読みながら「これ本当かな？」という会話を楽しめる少し理系の本なども、図書館にあると面白いのではないかと思います。

## ■女性活躍

続いて「女性活躍」というテーマで選んだ本を2冊。『世界を変えた50人の女性科学者たち』。これも定番の本ですね。残念ながら日本人の方は紹介されていません。しかし、キュリー夫人など、少し前の時代から現在も活躍されている方々までたくさん取り上げられていて、興味深いです。見開きで1人ずつ、イラストと共に解説されています。おそらく授業などで調べる際に、コンパクトで見やすい本を求める子どもたちもいるかと思いますが、そんな時に渡しやすい本ではないかと思います。また、いつ頃から女性たちが教育や科学の世界に関わってきたかということが示された「歴史年表」も面白いです。子どもたちに、こんな本を紹介してもよいかもしれません。

ただ今紹介した本は、科学者に限定していましたが、『世界を変えた100人の女の子の物語』にはスーパーモデルなども含めて、様々な女性が登場します。「女性活躍」と言われる時代ですので、女性が頑張らなければいけない感じでしょうか。アウンサンスーチーさんに始まり、ワンガリ・マータイさんまで五十音順に紹介されていますので、「何か調べよう」という時に目次から引いていくことができます。ちなみに、日本人として唯一紹介されていたのは、オノ・ヨーコさんでした。

## ■コミックエッセイ

コミックエッセイから、いくつか紹介します。コミックエッセイは、公共図書館などでも購入されていたりするのでしょうか？「これも学習マンガだ！」(<http://gakushumanga.jp/>)でも提唱していますが、「楽しみながら学ぶ」ということで、私の学校でも『ちはやふる』や『キングダム』など人気マンガのほか、『あさきゆめみし』といった定番の作品なども購入しています。同時に子どもたちからはコミックエッセイなどの要望もとても多く、これらも図書館に揃えています。

昨年のコミックエッセイで、とても人気があったのは『多分そいつ、今ごろパフェとか食ってるよ。』。非常に読みやすい本です。「人生って色々ある 嫌な人もいるし 理不尽な人もいる」「人の幸せが気になったり」「自分を責めてしまったり」といったこともありがちで、「いつも誰かのことを考えて 頭の中がぐるぐる」。でも、「考え方一つで…やつ(悩み)を消せるかも？」(p. 1~9)。人間関係で悩んだときに「こう考えたらいいよ」とその対処法を、色々アドバイスしてくれている本です。本書のタイトルは、作者の女性が相手の何気ない一言に傷ついて友人に相談の電話をした際、友人が言った「多分そいつ、今ごろパフェとか食ってるよ」という言葉が元になっているそうです。そもそもこういう本を手にするのは「自分が悪いのではないか」と思う繊細な人で、「自分は悪くない」と考える人は手に取らない(笑)。こういった作品は現在たくさん出版されていますが、タイトル買いすると失敗することもあります。必ず書店でお手に取っていただいて、中身をご覧になってから買われると安心かと思います。

昨年出版された中で非常に衝撃的だったのが『生理ちゃん』。元々ネットのサイトで公開されていたマンガです。これも私の学校の図書館に入っていますが、ものすごい人気で、今回の参加者に男性の方は少ないかと思いますが、ぜひ男性にも読んでいただきたい。小山健さんのへたうまな絵で、擬人化された生理痛の「生理ちゃん」が、毎月女性たちのもとにやってきます。第1話に登場する女性が「もう1カ月たったの？」と言うと、生理ちゃんは「どーですか 最近は」と世間話を始めます。しかし、しばらくすると「じゃあそろそろいつものを…」と言い放ち、女性をバシバシ殴り始める。すごいなという感じです(笑)。このリアルさが女子高生にはたまらないらしく、今や表現はここまでOKとなったのかと感じた作品でした。なぜか、第2話で生理ちゃんと男性編集者の人が一緒に買い物に行くシーンもあるのですが、「女性は生理があるから大変だよ」という男性に、「大変なのを生理を理由にできないのが大変なんですよ」と答える生理ちゃん。これを男性である小山健さんが描いているのがすごい。こういったマンガも高校生



はネットでたくさん見えています。図書館に置くかについては検討の必要があるかもしれませんが、こういった本があることも知っていただいて、それを使って子どもたちとどんな話をしていくかということは、やはり大人として考えていくべきかと思います。

続いて「母もの」。いわゆる「毒母」もの。「毒父もの」とも言えるかもしれませんが、『しんどい母から逃げる!!』。私自身、子どもが3人いるので、突っ込みを入れたくなる部分もありますが、これもとても人気のある作家さんで、学校図書館でも非常によく回転している。そもそも「いい子」は何かあっても、いつも自分のせいにしてしまうので、このコミックにもあるように、一旦親のせいしてみたら、案外うまくいったということはよくあるようです。こういったテーマの本も非常に多く出ていますので、ぜひ中身をお読みいただいて、「本質は何であるのか」「作家さんが言いたいことは何なのか」を見極めた上で、薦めたり購入されたりするとよいかと思います。そうしたポイントを押さえておくと、子どもたちとの共感にもつながっていくのではないかと思います。

うつ病関連の本もたくさん出ました。前々任校から今もつき合いがある元生徒の子から薦められて読んで、私自身もリアルに感じた本が『僕が僕であるためのパラダイムシフト』。以前『うつヌケ』(KADOKAWA, 2017年1月刊)という本が流行りましたね。うつになった方々が、どのようにその状態から抜け出したかが綴られていて、うつの度合いを表す「うつ君」が出てきます。『僕が僕であるための～』にも同じように、作者の分身ともいべき男性にまわりつく黒い「鬱」が登場し、彼は常にしんどい思いをしています。この「鬱」を払うために、男性がどのように動いていったかが描かれ、話の終わり方も、「鬱」な感じはまだ何となく現在進行形ではあるけれど、彼自身がそんな自分を受け入れ「かっこ悪い自分も自分だ」と思えるようになったという感じが伝わってきて、子どもたちにとっても救われる話ではないかと思います。すごい人になれなくてもいい。そういうところがリアルに伝わってくるコミックでした。

## ■他にもいろいろ

「他にもいろいろ」というテーマで集めた本の中から『黒板アート甲子園作品集』を紹介します。こういったビジュアル系の本も、非常に多く出版されるようになったという印象があります。表紙で使われている絵は、埼玉県の高校による黒板アートです。「黒板アート甲子園」は2016年より本大会が始まり、2018年度で第3回の開催となりました。そこでの受賞作を一挙に集めて紹介している本です。黒板アートは消してしまったら、それで終わってしまいますが、ホームページでも動画が公開されていますので(「日学・黒板アート甲子園」HP <http://kokubanart.nichigaku.co.jp/>)、ぜひ併せてご覧いただけたらと思います。主に美術部など、絵を描くことが好きな子たちが制作に関わっているようですが、黒板アートの描き方なども収録されていて、絵を描くことが好きな人たちにとっては見ているだけでも楽しいのではないかと思います。参加校の一覧なども載っています。卒業式のための黒板アートなど、おそらく都内のどの学校でもこういう活動をしている生徒はいると思いますので、こんな本も揃えて一緒に展示してもよいのではないかと思います。

最後にご紹介するのは、三浦しをんさんの『[愛なき世界](#)』です。これもとてもいい作品でした。三浦しをんさんは、コアな職人さんを描くのがとても上手な方ですが、この作品でも、大学で植物の研究を行っている女性が登場します。「T大」とあるので、おそらく東大でしょうか。主人公は料理人見習いの藤丸陽太。彼には元々、特に大きな夢や希望があったというわけでもなく、しかし子どもの頃から料理が得意だったということもあり、調理師の専門学校を卒業した後、T大そばの洋食屋に弟子入りし、住み込みで働くようになります。T大そばということもあり、デリバリーサービスのため陽太は研究室にも出向くようになりますが、そこで植物を研究する変わり者の面々と出会います。その中に、シロイヌナズナを愛する本村紗英もあり、陽太は彼女に惹かれていくようになります。本作品では、陽太と紗英の少し切ない関係が描かれていて、読み進めていくと、タイトルでもある「愛なき世界」の意味が分かってきます。「仕事って何だろう」とか「生きるって何だろう」ということを考えさせてくれる作品で、読後感がすごくさわやかです。自分も「頑張ろう」という気持ちにさせてくれる1冊でした。

## ■最後に

2018年を振り返ると、平成という時代が終わるということもあり、これから自分たちがどこに足をつけて生きていくのかということ、非常に考えさせられる年であったと感じています。私たちが考えている子どもたち、特にヤングアダルトの世代は「本を読まない」と思われている印象がありますが、司書として現場で子どもたちと触れ合いながら感じることは、読むことが「嫌だ」と思っているわけではないということです。ただ、あまりに本が多すぎて、何を讀んだらいいのか分からない。また、情報をたくさん持っているつもりになっているけれど、友だちの口コミなど、実はその情報源がとても狭いということです。私たち大人は、新聞なりニュースなりを通して得た情報が自分の中に蓄積されていて、それを基盤に、新しく入ってきた情報をどう判断し、処理するかを考えます。しかし子どもたちは、そういった判断のための基盤がないまま、LINEやTwitterなどから入ってくる情報だけで満足してしまっていて、世界が狭くなっているのではないかと感じます。そういった状況を踏まえつつ、子どもたちに対し「大人になっていく時に、こういう情報は知っておくことが大切だよ」とか、「こういうことも一緒に学んでいくと楽しいよ」「世界はもっと広いんだよ」ということを伝えられるよう、学校図書館として本を選び、提供していきたいなと思っています。

先程も申し上げた「埼玉県の高校図書館司書が選んだイチオシ本」については、ぜひ皆さんも、私たちのホームページをご覧くださいと思います。ヤングアダルトコーナーを担当されている図書館の方々は、どんな本を選んだらいいのかということ、常にとても悩んでいらっしゃると思います。ぜひ、こういった情報をご活用いただいたり、また、分からないことは、直接他の現場の皆さんに聞いていただくということも1つの方法ではないかと思っています。あるいは、子どもたちに直接聞いていただくのもよいかと思っています。「どんな本が好きなの」「何でこの本を読んでいるの」とか「どんなことに興味があるの」と言うと、最初はうるさがられるかもしれませんが、子どもたちは大人から、それも気持ちのいい大人から声を掛けられるのは大好きです。ですので、一緒に子どもの本、そしてヤングアダルトについても考えていただけたらと思います。

皆様、どうもありがとうございました。

(於：株式会社図書館流通センター 2019年3月13日・14日)  
※本図書リストおよび講演録の無断転用・複製は固くお断りいたします。